

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 月までの経験的飛行 : Francis GodwinのThe man in the moonにおける創造的飛行装置と宇宙空間  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 穴本, 玲奈(Anamoto, Rena)   |
| Publisher        | 慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人  |
| Publication year | 2023  |
| Jtitle           | Colloquia (コロキア). No.44 (2023. ) ,p.43- 52  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 英文学   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20231220-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20231220-0043</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 月までの経験的飛行\*

—Francis Godwin の *The Man in the Moon* における創造的飛行装置と宇宙空間—

穴本 玲奈

17世紀ヨーロッパは、まさに月への関心が急速に高まった時代である。1600年代に入ると、天文学は著しく発展する。ドイツの天文学者 Johannes Kepler (1571-1630) による1604年の超新星の観測に加え、1609年にイタリアの天文学者 Galileo Galilei (1564-1642) は新型の望遠鏡で月面の凹凸や黒点を観測した。その観測結果が1610年に *Sidereus Nuncius* (『星界の報告』) で報告された。それによると、月面の明るい部分は地表で、暗い部分は海面であり、地球上の山や谷のように月面には隆起した部分と窪んだ部分があると述べられている。Kepler もまた、*Sidereus Nuncius* への返答として書かれた *Dissertatio cum Nuncio Sidereo (Conversation with the Sideral Messenger, 1610)* にて Galilei の月面の地理に同意している。そのことは、1638年に死後出版された *Somnium* においても言及されている。<sup>1</sup> この画期的な望遠鏡による月面上の発見は、当時の文学に新たな着想を与えた。

天文学の分野で月に関する理論が頻繁に提唱されるだけでなく、文学の領域でも、特に1630年代から月旅行を題材とした物語が多く出版されている。<sup>2</sup> この月旅行文学のムーブメントの規範的作品が、イングランド国教会の主教、作家 Francis Godwin (1562-1633) の *The Man in the Moon* (1638) である。<sup>3</sup> 物語の主人公であるスペイン人の Domingo Gonsales が、渡り鳥の雁 ('gansas') にエンジンを括り付けた手製の飛行装置を用いて月へと旅をし、月世界の住人、生活、政治、学問などを詳細に描写した物語である。*The Man in the Moon* の執筆時期は1620年代だと推定され

---

\* 本稿を執筆するにあたり、井出新教授（慶應義塾大学）、徳永聡子教授（慶應義塾大学）には大変丁寧なご助言とご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

<sup>1</sup> Johannes Kepler, *Somnium*, trans by Edward Rosen, (Madison: University of Wisconsin Press, 1967) の Kepler による註 154 を参照。同書は、おそらく1609年から1610年の間に初版の梗概が書かれ、天文学者の間で回覧されたとされている。その手稿がイングランドでも回覧されていた可能性があるということは、John Donne の *Ignatius His Conclave* (1611) の同作への言及からもわかることである。そして Catherine Gimelli Martin によれば、Kepler の *Somnium* は 'was pirated to England in 1611 and clearly known to him' であるとしている。Marjorie Nicolson も1611年には大陸に出回っていたとしている。したがって、現存する1634年版の大幅に註釈が加えられる以前の手稿を Godwin も閲覧していた可能性がある。Catherine Gimelli Martin, 'Sailing to the Moon: Francis Bacon, Francis Godwin and the First Science Fiction' in *Literature in the Age of Celestial Discovery: From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, p. 120. Kepler の *Somnium* の初稿執筆時期に関する議論は、Marjorie Nicolson, 'Kepler, the *Somnium*, and John Donne' *Journal of the History of Ideas*, 1.3 (1940); Nicolson, *Science and Imagination*, pp. 73-74 を参照。

<sup>2</sup> Cyrano de Bergerac, *L'Autre monde ou les états et empires de la Lune* (Paris, 1657); Margaret Cavendish, *The Description of a New World, Called the Blazing-World* (London, 1666); Aphra Behn, *The Emperor of the Moon* (London, 1687) などが月旅行を題材とした物語の代表例である。また、古代ギリシアの風刺作家 Lucian of Samosata (120 AD -c. 180 AD) による月旅行物語 *A True Story* の英訳も1634年に初めて Francis Hicckes (1565/5-1631) によって出版されている。Francis Hicckes, *Certain Select Dialogues of Lucian: Together with His True [sic.] Historie, Translated from the Greeke into English* (Oxford, 1634) STC (2nd ed.) 16893. Hicckes の古代ギリシア文献の翻訳活動に関しては、Stuart Gillespie and Christopher Pelling, 'The Greek Translations of Francis Hicckes (1565/6-1631)' *Translation and Literature*, 25.3 (2016), pp. 315-38 を参照。

<sup>3</sup> 以下 *The Man in the Moon* からの全ての引用は、Francis Godwin, *The Man in the Moon*, ed. by John Anthony Butler (Ottawa: Dovehouse Editions Inc., 1995) による。

ており、<sup>4</sup> ポーランド人の天文学者 Nicolaus Copernicus (1473-1543) の太陽系モデルや Galilei の望遠鏡による月面観測結果など、当時の刷新的な天文学的資料に基づいて話が構成されている。しかし、本作品の特徴は、単に当時の天文学理論がフィクション内に紹介されているのだけではなく、むしろそれらを援用して地上から月世界までの移動手段および経路を描いている点である。つまり、本作品は当時の月の居住可能性理論に加え、地球人の月への渡航可能性を提示している。<sup>5</sup> したがって、本論考の目的は、Godwin による月までの飛行装置の創造という試みがそれまでの文学的な発想とは異質であることに着目し、月までの飛行経路の描写が、17 世紀に入ってから太陽中心説、無限宇宙（宇宙は無限に広がり続ける空間であるという理論）、世界の複数性（この宇宙には地球のような自然や生命体を有する世界が複数存在するという理論）<sup>6</sup> や月に関する議論などの Copernicus 的天文学理論を経験的に実証するための裏付けとなっていることを明らかにすることである。

## 1. 月までの飛行デバイス

このような天文学の爆発的発展の最中に地球上の人間が手製の飛行装置で月に行って帰ってくるといふ虚構を構想したのが、Godwin である。同年代の月世界旅行物語と比べてこの物語が稀有なのは、自ら月までの飛行機械を創作している点である。例えば、Lodovico Ariosto (1474-1533) の *Orlando Furioso* (初版 1516 年)<sup>7</sup> の第 34 歌では、発狂した Orlando を正常に戻すために、イギリスの王子 Astolfo が月へ旅をする。まずはペガサスに乗って樂園までたどり着き、そこで出会ったヨハネに連れられて火の馬車で月に行く。火の馬車はヨハネが用意したもので、それは ‘a chariot with a yoke | of four horses was readied at his behest | that long ago in Judah Elijah took | as is recorded in the older test- | ament, and by which he was able to fly | miraculously upward into the sky’ (Canto xxxiv)<sup>8</sup> である。火の馬車は、明らかに旅行者 Astolfo の創作物ではない。火の圏<sup>9</sup> を通り抜ける時、身体が焼かれない理由をヨハネの奇跡によるものだと説明している点からも、彼の月旅行は

---

<sup>4</sup> 執筆年代に関する議論は、Grant McColley, ‘The Date of Godwin’s “Domingo Gonsales”’, *Modern Philology*, 35.1 (1937), 47-60 を参照。

<sup>5</sup> つまり、Andrew Hadfield が説明するように、‘fiction is a reflection of a reality, textual or otherwise, and that it comes after a fact’ ということなのである。Andrew Hadfield, *Literature, Travel, and Colonial Writing in the English Renaissance 1545-1625* (Oxford: Clarendon Press, 1998), p. 6.

<sup>6</sup> イタリア人哲学者 Giordano Bruno (1548-1600) は、イングランド滞在中に *The Ash Wednesday Supper* (1584) や *On the Infinite, Universe and Worlds* (1584) を著し、その中で太陽中心説を肯定すると同時に、無限宇宙および世界の複数性を提唱した。無限に拡大し続ける宇宙空間には、無数の世界が存在しており、そのうちの 1 つの世界が地球であるという考えのもと、神がその広大な宇宙のたった一部にだけ気を配るはずがないと主張した。さらに詳しい説明は、ここでは省略する。Bruno の宇宙に関する哲学的な考えは、Hilary Gatti, *Giordano Bruno and Renaissance Science*, (Ithaca: Cornell University Press, 1999) を参照。Copernicus から Galilei までの天文学理論の概要は、A. コイレ『閉じた世界から無限宇宙へ』横山雅彦訳（みすず書房、1973 年）を参照。

<sup>7</sup> John Harington (c. 1560–1612) によって英訳され、1591 年にロンドンにて出版された。Lodovico Ariosto, *Orlando Furioso in English Heroical Verse, by Iohn Harington[n]*, (London, 1591) STC (2nd ed.) / 746.

<sup>8</sup> Ludovico Ariosto, *Orlando Furioso: A New Verse Translation*, trans. by David R. Slavitt (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2009).

<sup>9</sup> プトレマイオスの宇宙システムでは、地球と月の天球層の間に火の圏 (sphere of fire) が存在するとされていた。太陽中心説によってこの構造は打ち壊された。John Donne (1572-1631) は *An Anatomie of the World* (1611) にて ‘And new philosophy calls all in doubt, | The element of fire is quite put out, | The sun is lost, and th’earth, and no man’s wit | Can well direct him where to look for it’ というように、火の圏を含むこれまでの宇宙構造が地動説により揺らいでいることに嘆いている。John Donne, ‘An Anatomie of the World’ in *The Complete Poetry and Selected Prose of John Donne*, ed. by Charles M. Coffin (New York: Modern Library, 2001) pp. 192-205 (pp. 198-99).

空想性が高いと言える。

イングランド人劇作家・詩人 Ben Jonson (1572-1637) の宮廷仮面劇 *News from the New World Discovered in the Moon* (1620) では、古代ギリシアの風刺作家 Menippus のように、詩人が詩神の羽で月まで行ったと伝令が伝えている。<sup>10</sup>

FIRST HERALD No, I assure you, he rather flew upon the wings of his muse. There are in all but three ways of going thither, One is Endymion's way, by rapture in sleep, or a dream; the other, Menippus his way, by wing, which the poet took; then the third, old Empedocles' way, who then he leapt into Etna, having a dry, sere body and light, the smoke took him and whift him up into the moon, where he lives yet, waving up and down like a feather, all soot and embers coming out of that coal-pit.  
[...]

SECOND HERALD Then know we do not move these wings so soon,  
On which our poet mounted to the moon  
Menippus-like, but all 'twixt it and us  
Thus clears and helps to the presentment, thus. (149-55, 238-41)

詩神の羽という飛行手段は、第一の伝令が挙げた他の2つの例と同様に神話であるのと同時に、具体的な飛行メカニズムに欠いている。ここでの詩神の羽はむしろ、詩想によって誤った哲学的、科学的知識を論駁しうる可能性を示している。<sup>11</sup> さらに、1634年に英語翻訳版が出版された Lucian of Samosata (c. 125 AD-c. 180 AD) の *A True Story* (『本当の話』) では、主人公が船を進めていると旋風が巻き起こり、空中へ飛び立つ。海には落ちずに、さらに風が帆へ吹き付けて上空へ舞い上がっていき、8日目に空中に島が見える。その島こそが月世界である。つまり、月までの飛行手段は羽や魔力—月まで船を持ち上げるほどの風を魔力とも呼べるかもしれないが—などが施されていない、海上を進む船ということになる。Jonson の詩神の羽とは違って、船は現実的な移動手段ではあるものの、主人公の創作物でもなければ月旅行を目的として手配されたものでもない。*The Man in the Moon* の Gonsales のように、主人公が自らの意思で遠くまで飛び立とうと目論み、飛行装置を創作する過程とその装置の仕組みを描いている作品は非常に稀有である。

Gonsales の飛行装置は、試作と実験を繰り返した末に完成した発明品である。Gonsales は、インドからスペインへ帰る航海の途中で、喜望峰を回った直後に体調が悪化したため、セント・ヘレナ島にて休養することになる。そこで発見した白鳥1羽を飼い慣らし、現地で出会った黒人 Diego とのリモートでの会話のために、メッセンジャーとして手懐けることに成功する。次に、4羽の雁にコルク製の滑車を装着して木の塊を運ぶ実験や、2・3羽加えた雁の装置で子羊を運ぶ実験を重ね、‘At last, after divers trials, I was surprised with a great longing to cause myself to be carried in the like sort’ (p. 80) のように、自分も空を飛んでみたいという強い欲望に駆られる。<sup>12</sup> このよう

---

<sup>10</sup> Lucian の *Icaromenippus* では、詩人 Menippus が Icarus を真似て羽を身に纏い、天空まで飛んでいく。

<sup>11</sup> Jonson の *News from the New World Discovered in the Moon* における天文学的アプローチに関しては、Ben Jonson, ‘News from the New World Discovered in the Moon’ in *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, ed. by Martin Butler and David Bevington, 5 (Cambridge: Cambridge University Press, 2012), pp. 425-44 の序文を参照。

<sup>12</sup> 空を飛んだ最初の生き物をイエス・キリストである子羊に任命したのは、Godwin のキリスト教の信念と、

にして、彼は30～40羽ほどの雛鳥を連れ帰り、育てて自分自身を運ぶことができる飛行装置を創案し始める。彼が‘gansas’と呼ぶその渡り鳥は、長距離移動が可能かつ強靱なため、人間を遠くまで運ぶのに適していると考えたのである。小さな滑車が施された総計25羽の雁を用いた飛行装置が、最終的に Gonsales を月へと運ぶ。

It was now the season that these birds were wont to take their flight away, as our cuckoos and swallows do in Spain, towards the autumn. They, as after I perceived, mindful of their usual voyage, even as I began to settle myself for the taking of them in, as it were with one consent rose up, and, having no other place higher to make toward, to my unspeakable fear and amazement struck bolt upright and never did lin towering upward and still upward for the space, as I might guess, of one whole hour, toward the end of which time methought I might perceive them to labour less and less till at length, O incredible thing! They forebore moving anything at all and yet remained unmovable, as steadfastly as if they had been upon so many perches. The lines slacked; neither I nor the engine moved at all, but abode still, as having no manner of weight (pp. 86-87).

月まで到達できたことは偶然の産物ではあるが、試行錯誤を繰り返し、最終目標であった人間を空に飛ばすことに成功した Godwin の創作的探究心が反映されている。そして、読者と同様、Gonsales 自身も自分の装置が思わぬ動きをし、未開の地へ足を運ぶことに恐れと驚異の念を抱いている。

Godwin が Gonsales を介在として創案した鳥の飛行装置は、イングランド人自然哲学者、聖職者、科学者である John Wilkins (1614-1672) の著書『月世界の発見』(*The Discovery of a World in the Moone*) の第3版 (1640) において、次のように論評されている。

[H]e [Gonsales] supposeth that many of them [swans/ gansas] together, might be taught to carry the weight of a man; especially if an engine were so contrived (as he thinks it might) that each of them should beare an equall share in the burden. So that by this means, tis easily conceivable, how once every yeare a man might finish such a voyage; going along with these birds at the beginning of the winter, and againe returning with them at the Spring. And here, one that had a strong fancy, were better able to set forth the great benefit and pleasure to be had by such a journey.<sup>13</sup>

Wilkins は物語全体を‘fancy’ と称しているものの、鳥を用いた移動手段には同意を示し、またそういう奇想が世界に喜びや利益をもたらすと評している。この Wilkins による Godwin の *The*

---

空を飛ぶという人間の能力を超えた神的な力を得たいという、いわば「背信的な」野望との葛藤の末の決断であるように思える。

<sup>13</sup> John Wilkins, ‘Discovery of a World in the Moone’ in *A Discourse Concerning a New World & Another Planet in 2 Bookes*, (London, 1640), pp. 241-42. STC (2nd ed.) 25641.

*Man in the Moon* への言及は、1638年の初版<sup>14</sup>にはなかった第14章 ‘That tis possible for some of our posteritie, to find out a conveyance to this other world; and if there be inhabitants there, to have commerce with them’ においてなされており、Godwin のテキストを読んだ後に人間が月へ渡航する手段について試案していることがわかる。<sup>15</sup> 彼自身もまた、同書にて ‘I doe seriously, upon good grounds, affirme it possible to make a flying Chariot’ (p. 238) と述べているように、実際に Oxford の Wadham College にいた頃、Robert Hooke (1635-1703) とともに空飛ぶ馬車のモデル製作に取り組んでいる。彼は1648年に出版された *Mathematicall Magick* の第2巻において、空飛ぶ馬車の設計をまとめている。<sup>16</sup> Godwin が創案した鳥の飛行機械のエンジンを「より工夫した」形で、物理学的な知識とともに独自の飛行馬車をデザインした。したがって、Godwin の飛行装置は、同世代の Oxford 界隈の学者らに影響を与え、彼らの試案と織り合わさっていったと言える。

## 2. 地球から月までの旅行経路

Godwin の *The Man in the Moon* ほど、地球を飛び立ってから月に至るまでの経路および宇宙空間を、一人称の語りで仔細にわたって描写している作品はそれ以前にはない。<sup>17</sup> Lucian の *A True Story* では、船を進めているうちに旋風が巻き起こってはるか上空へ飛び立ち、8日目に島が見えてくる、という描写のみである。それまでの空間がどうであるとか、宇宙の構造がどうであるなどといった記述は全くない。Ariosto の *Orlando Furioso* では前述の如く、聖ヨハネに牽引されて火の馬車で火の圏を通り抜けると、月の国へたどり着く。それ以外の宇宙空間に関する記述はない。Jonson の *News from the New World Discovered in the Moon* もまた、月世界の住人や行政区域、地理、乗り物などは描かれているが、羽を用いた詩人の宇宙空間での経験は説明されていない。

*The Man in the Moon* では、Gonsales が地上を飛び立ってから月世界にたどり着くまでの経路および宇宙空間が詳細に描かれている。地上を飛び立ってから1時間ほどすると、Gonsales は宇宙空間に出る。そこでは地球の中にある磁力のようなもの<sup>18</sup>の範囲外になるため、雁は羽を動かさずとも、猛烈なスピードで直進する。<sup>19</sup> そしてすぐに、悪魔や悪霊の幻影に出会う。悪霊たちはさまざまな言語で Gonsales に話しかけ、豪華な食料や酒を与える。この宇宙空間に関して、

---

<sup>14</sup> 初版は、John Wilkins, *The Discovery of a VWorld in the Moone. Or, a Discourse Tending to Prove, That 'tis Probable There May Be Another Habitable World in That Planet* (London, 1638) STC (2nd ed.) 25640.5 を参照。

<sup>15</sup> Wilkins の *The Discovery of a World in the Moone* における Godwin の *The Man in the Moon* から受けた影響に関しては、David Cressy, ‘Early Space Travel and the English Man in the Moon’, *American Historical Review*, 111.4 (2006), 961-82 (pp. 969-70) を参照。

<sup>16</sup> John Wilkins, *Mathematicall Magick, or, The VVonders That May Be Performed by Mechanicall Geometry* (London, 1648) Wing / W2199.

<sup>17</sup> Kepler の *Somnium* (1634) は少し特殊である。「レヴァニアからのデーモン」という章では、人間や精霊がいかにして地球から月へ渡航するかについてやや詳細に語られているが、これは物語の主人公 Kepler は夢の中で読んだ一冊の本の主人公 Duracotus に対して語ってくれた精霊の語りである。Kepler の実体験でも、Duracotus の実体験でもない。したがって、一人称の語りで月までの経路と宇宙空間を語っている物語は Godwin 以前には彼の *The Man in the Moon* のほかないと結論を下している。

<sup>18</sup> 本文では、‘I found then by this experience that which no philosopher ever dreamed of, to wit, that those things which we call heavy do not sink toward the centre of the earth as their natural place, but as drawn by a secret property of the globe of the earth, or rather something within the same, in like sort as the lodestone draweth iron, being within the compass of the beams attractive’ (p. 87) と書かれている。いわば「引力」のことであるが、引力という概念は1687年にIsaac Newtonの万有引力の法則で初めて生み出される。そのため、Godwin は ‘a secret property’ と表現している。

<sup>19</sup> フランス人作家 Cyrano de Bergerac (1619-1655) は、1657年に死後出版された *Comical History of the States and Empires of the Moon* において、Godwin と同じように身体は一切動かしていないのに、月に向かって上昇しているのを感じたと描写している。この点は Godwin の影響を感じる。

Catherine Gimelli Martin は ‘Both writers [Godwin and Kepler] seem to respond to the biblical view that demons roam the middle sphere between Earth and the higher heavens, thereby stressing that scripture and the new astronomy are compatible’ と述べている。<sup>20</sup> Godwin の Gonsales も Kepler の Duracotus も、月の国までの道のりで悪魔や悪霊に世話になる点で類似しており、どちらも新しく提唱された宇宙像と聖書との間に矛盾をきたさないための作者の創意工夫だと言える。

*The Man in the Moon* では Gonsales がさらに月に近づくと、空中にはイナゴ (locusts) の大群が飛び交っているのを発見する。Gonsales によると、地上で見られる大量のイナゴは月世界からやってきたものである。

I saw as it were a kind of cloud of a reddish colour growing toward me, which continually growing nearer and nearer, at last I perceived to be nothing else but a huge swarm of locusts. He that readeth the discourses of learned men concerning them, and namely that of John Leo in his description of Africa, how that they are seen in the air many days before they fall upon a country. Adding unto that which they deliver, this experience of mine will easily conclude that they cannot come any other place than the globe of the moon (p. 92).

このイナゴの大群と月との関係は、聖書の文脈からも解釈できる。旧約聖書のヨエル書の第1章によると、主たる神によって地上に送り込まれたイナゴの大群は、集団で地上の穀物や農作物を食い尽くした生き物である。主に仕える祭祀らが祭壇で神の赦しを請うと、神は ‘I will restore to you the years | that the swarming locust has eaten, | the hopper, the destroyer, and the cutter, | my great army, which I sent among you’ (Joel 2:25) と述べ、再び食物や酒などを施す。そして神の計画が終わり、主の日がやってくる前には、 ‘The sun shall be turned to darkness, and the moon to blood’ (Joel 2:31) と主は言う。Gonsales のイナゴの大群の描写が「赤色の雲のようなもの」としている点は、聖書の言葉を引用したと見られる。ここでもまた、聖書と新天文学の融合した虚構を創り上げている。

21

Gonsales の経験した宇宙空間は、地球の磁力圏から離れるとその大気は均一で安定している。そしてそこには、Ariosto の *Orlando Furioso* の空間とは正反対であるが、火の圏など存在しないと断言している。

O vanities, fancies, dream! After the time I was once free from the attractive beams of that tyrannous lodestone the earth, I found the air of one and the selfsame temper, without winds, without rain, without mists, without cloud, neither hot nor cold, but continually after one and the same tenor, most pleasant, mild, and comfortable, till

---

<sup>20</sup> Martin, ‘Sailing to the Moon: Francis Bacon, Francis Godwin and the First Science Fiction’ in *Literature in the Age of Celestial Discovery: From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, pp. 109-32 (p. 120).

<sup>21</sup> Lucian の *A True Story* では、イナゴではなく蛙が月世界の空中に大量に飛び交っている。月の住人たちは、その蛙を主食としている。先に述べたように、月と地球の間の空間に関しては記述がないため、蛙が宇宙空間を行き来しているかどうかは定かではない。Kepler の *Somnium* においても、月上では蛇のような種族が優勢であることが説明されているが、月までの宇宙空間では、移動する精霊や人間以外の生物は特に言及されていない。

my arrival in that new world of the moon (p. 93).

この空間が風もなく穏やかで、空気が清らかで安定していることは、別の箇所でも述べられている。それは、地球の磁力圏から解放され、悪霊たちの幻影の姿が消えたあたりからである。

The air in that place I found quiet, without any motion of wind, and exceeding temperate, neither hot nor cold [...] Lastly, now, it is to be remembered that after my departure from earth I never felt any appetite of hunger or thirst. Whether the purity of the air, our proper element, not being infected with any vapours of the earth and water, might yield nature sufficient nutriment, or what else might be the cause of it, I cannot tell, but so I found it, although I perceived myself in perfect health of body, having the use of all my limbs and strength of body and mind rather beyond and above than anything short of the pitch or wonted vigour (pp. 89-90).

月と地球の磁力圏の間の空間は、火の圏ではないというこの理論は、Copernicus の天球体系に依拠している。こういった天球間の描写は、Godwin の最新の天文学に対する関心の表れである。そして、大気の性質の均一さが Gonsales の体に滋養を与えるだけでなく、月に到着するまでの間に睡眠さえも可能としているのである。Gonsales が漂着する月世界がユートピア的に描かれているように、そこへ向かう経路をもそのように描写しているのは、Godwin 独自の創作である。というのも、Kepler の *Somnium* では、人間が地球から月まで移動するには極度の寒さや呼吸困難などのさまざまな困難を経験しなければならず、精霊の力や薬等に頼らなければ体はボロボロになってしまうのである。先にも述べたように、*Orlando Furioso* の Astolfo は火の圏に突入しても身体が燃えてしまわないように、聖ヨハネの神的な力を借りている。Gonsales が自らの創作で宇宙に飛び出し、(多少悪霊にはお世話になっているが) 人間の力だけで宇宙空間を彷徨いながら耐え抜くという筋書きは、Lucian の *A True Story* や Jonson の仮面劇とは違い、滑稽さを伴わずに Godwin は天文学の知識を月旅行物語に真剣に取り入れていることが読み取れる。<sup>22</sup>

### 3. 経験的宇宙

Godwin の *The Man in the Moon* は、伝統的なプトレマイオスの宇宙像からコペルニクスの宇宙への革命の変遷の軌道の中心に位置しており、その変遷が同作内に垣間見られる。すなわち、Gonsales の実際の観測により宇宙の構造について理解を深めるというアプローチは、Copernicus 以降の天文学に見られる傾向である<sup>23</sup>と言えるが、作者 Godwin はその手法を用いて自身の宇宙

---

<sup>22</sup> Cressy, 'Early Space Travel and the English Man in the Moon', *The American Historical Review*, p. 978.

<sup>23</sup> 1543年にCopernicusは著書『天球の回転について』(*On the Revolutions of Heavenly Spheres*)で、地球は宇宙の中心で静止しているというこれまでの伝統的なアリストテレス・プトレマイオスの宇宙観に反する太陽中心説(地動説)を提唱した。地球が24時間かけて地軸を1周する日周運動と、太陽を宇宙の中心としてその周りを1年かけて回る年周運動を認めている。地球の日周運動に関しては、航海中に船上にあるものが静止して見えて船の外にあるものが動いているように見える現象と全く同じであるように、見かけ上では天体が運動しているように見えるが、実際は地球が回転していると論じている: 'As a matter of fact, when a ship floats on over a tranquil sea, all the things outside seem to the voyagers to be moving in a movement which is the image of their own, and they think on the contrary that they themselves and all the things with them are at rest. So it can easily happen in the case of the movement of the Earth that the whole world should be believed to be moving in a circle' (Book 1, Chapter 8); 'I think it necessary above all



像を裏付けている。例えば、物が地球の中心に落ちていく働きは、地球が秘めている物を引きつける力、つまり磁力のようなものによるもので、地球から離れたらその磁力から解放されるということに気がつく場面が挙げられる。

I perceived them to labour less and less till at length, O incredible thing! they forbore moving anything at all and yet remained unmoveable, as steadfastly as if they had been upon so many perches. The lines slacked; neither I nor the engine moved at all, but abode still, as having no manner of weight.

I found then by the experience that which no philosopher ever dreamed of, to wit, that those things which we call heavy do not sink toward the centre of the earth as their natural place, but as drawn by a secret property of the globe of the earth, or rather something within the same, in like sort as the lodestone draweth iron, being within the compass of the beams attractive (pp. 86-87).

このように、雁が羽を動かすのをやめてもなお直進し続けているという現象を目撃したことにより、地球のものをその中心に引っ張る属性を証明している。他にも、Gonsales はこれまでの哲学者が主張してきた地球の不動性は全くの嘘であり、それは自分の目が証明したと述べている。

Philosophers and mathematicians I would should now confess the wilfulness of their own blindness. They made the world believe hitherto that the earth hath no motion [...] Only this I say: allow the earth his motion, which these eyes of mine can testify to be his due (p. 91).

すなわち Godwin は、Gonsales が実際に自らの目で宇宙空間から観察した地球と月を、Gonsales 自身が語るという形式で描いているのである。彼が宇宙から見た地球の姿は、我々が地上から見る月のように、反転のある光り輝く惑星である。そしてその斑点が毎時間少しずつ移動していることを目撃し、地球の自転運動を確認する。彼は自らの目で観測した結果、Copernicus の理論に同意している。宇宙空間から見る地球の回転運動を、彼は ‘no other than a huge mathematical globe leisurely turned before me, wherein successively all the counties of the earthly world within the compass of twenty-four hours were represented to my sight’ (pp. 90-91) かのようであると表現している。そして、月から見た地球は、地球から見た月よりも大きく、外から見た地球は毒々しく光る青色である。宇宙から地球を描写する際に、Gonsales は実際の観察によってこれまでの宇宙論を論駁したり受容したりしながら、16 世紀以降に新たに発見された月に関する事実や宇宙構造を証明する形式をとっている。彼にとって、経験こそが彼の信じる「真実」を暴く手段なのである。

---

that we should note carefully what the relation of the Earth to the heavens is, so as not—when we wish to scrutinize the highest things—to be ignorant of those which are nearest to us, and so as not —by the same error—to attribute to the celestial bodies what belongs to the Earth’ (Book I, Chapter 4); ‘the ratio of order in which these bodies succeed one another and the harmony of the whole world teaches us their truth, if only as they say we would look at the thing with both eyes’ (Book I, Chapter 9). Nicolaus Copernicus, *On the Revolutions of Heavenly Spheres*, trans. by Charles Glenn Wallis (New York: Prometheus, 1995).

宇宙から見た月は、地球とは違い、地上で見たままの白色をしている。月の斑点の形状は常に一定で、同じ面を地球側に見せている。月の表面は海と陸地に覆われており、海には島々が点在している。そして月明かりは単なる太陽光の反射であることにも気がつく。ここでも Gonsales は ‘How ill this agreeth with that which our philosophers teach in the schools I am not ignorant. But alas, how many of their errors hath time and experience refuted in this our age’ (p. 93) と、Gonsales の（架空ではあるが）実際の月観察や Galilei や Kepler による望遠鏡を用いた実際の月面観測によって、伝統的に長年信じられてきた世界の単一性や、月光によって狂気に陥ってしまうといった迷信に対する反証を行っている。Jonson の *News from the New World Discovered in the Moon* においても、Galilei の *Sidereus Nuncius* で報告された月面の明暗や凹凸から月世界にも海や山があるとし、さらに想像力を広げ、生物が生息し国や自治区、政府や法律もあると架空の世界を創造している。しかし、*The Man in the Moon* との決定的な違いは、Jonson の仮面劇は詩人が詩の力で新世界についての発見を伝達している点である。対照的に、Godwin の散文は、同時代の哲学者や天文学者らの机上の理論や望遠鏡による観測を、主人公にその目撃者として立証させている。この Godwin の語りに関して、Nicolson は ‘In Godwin’s tale, unlike Kepler’s, the actual ascent to the moon offers the most interest because of its reflection of contemporary scientific ideas’ と論じている。<sup>24</sup> 17世紀初期の実世界で主張された月に関する新理論をもとに、物語の主人公が月までの未来的な旅行を経験的に語る語りの形式は、Godwin 以前の作品には見られない先駆的な作品であると位置付けることができる。

#### 4. 結論

Godwin が生きた 16・17 世紀は、Columbus (1451-1506) が発見した地は「新大陸」であることがイタリア人探検家 Amerigo Vespucci (1454-1512) によって明らかになり、イングランド人探検家 Walter Raleigh (c. 1554-1618) が新大陸に入植した世紀転換的な時代である。そして、十何世紀にもわたって多くの哲学者や天文学者に信じられてきた-ptolemaic 的な宇宙体系を大きくゆるがした革新的な時代でもある。そのような時代の最中に、1 人のイングランド国教会の主教がその新しい天文学的発見と理論を援用し、人類全体に利益をもたらす潜在的な可能性を含んだ飛行デバイスを創り、実証的に月までの宇宙空間を叙述している。しかし、それは Kepler の *Somnium* ほど説明的ではなく、Jonson の仮面劇ほど空想的でもない。Martin は Godwin の月探検は ‘reveals startling deviations from myth and fantastic flying lore both in detail and general outlook’ だと言明している。<sup>25</sup> そして、*The Man in the Moon* を読んで自身の月に関する論文に 1 章を付け加えた Wilkins の *A Discourse concerning A New world* において、Godwin のように強い想像力があれば、実社会の利益にも変えられると考察する。<sup>26</sup>

Godwin はしばしば作中で、明言を避ける箇所が散見される。<sup>27</sup> その大半は天文学的知識に関

---

<sup>24</sup> Marjorie Nicolson, ‘Cosmic Voyages’, *ELH*, 7.2 (1940), 83-107 (p. 102).

<sup>25</sup> Martin, ‘Sailing to the Moon: Francis Bacon, Francis Godwin and the First Science Fiction’ in *Literature in the Age of Celestial Discovery: From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, pp. 109-32 (p. 109).

<sup>26</sup> ‘In briefe, doe but consider the pleasure and profit, of those later discoveries in America, and wee must needs conclude this to be inconceivably beyond it’. Wilkins, ‘Discovery of a World in the Moone’ in *A Discourse Concerning a New World & Another Planet in 2 Bookes*, p. 242.

<sup>27</sup> 例えば、 ‘if at the leastwise it may please God that I do return safe home again into my country to give perfect

する部分においてである。これは単に検閲制度に対する対策のためだけでも、Godwin の知識不足のためだけでなく、学者による世紀的な発見や研究の成果によって起きた秩序の転覆に対する、当時の人が期待や興奮と同時に感じた畏怖の念を表している。この空想の中のリアルさが、読者の想像力を刺激し、宗教的、思想的、哲学的秩序が覆る可能性に怯えさせると同時に、新世界がもたらす利益を期待させている。Martin は ‘True, most of Gonsales’s challenges are physical, not mental or sociological, but his inventor must be credited with uniquely foreseeing how a new and potentially inhabited cosmos “out there” in space offers an especially exhilarating screen on which to project the full range of present and future hopes, dreams and fears’ と概括している。この見解は正鵠を射てはいるが、Godwin のフィクション内では、その「物理的な挑戦」こそが現実と空想、そして現代と未来を繋いでいるということこそ強調されるべきなのである。<sup>28</sup> 言い換えるならば、Gonsales は同世代の科学者らが発展させていった月の居住可能性理論や地球の回転運動を単に理論的に想定するのではなく、具体的に飛行装置を創り、空へ飛び立ってそのような理論を体験的に実証しようとする物語の展開が、伝統からの脱却を示している。

---

instructions how those admirable devices, and past all credit of possibility, which I have lighted upon may be imparted unto public use’ (p. 75) と主張しているが、その具体的な装置の設計や仕組みに関しては述べられていない。ただ、その装置によって、人間が空を飛べるようになり、動物を使わずとも伝言を遠くへ伝えることが可能になるという。この内容を伴わない主張は、彼の謎めいた *Nuncius Inanimatus* (1629) においても同様な手法で論じられている。他にも、 ‘I must be advised how I be over-liberal in publishing these wonderful mysteries, till the sages of our state have considered how far the use of these things may stand with the policy and good government of our country’ (p. 75); ‘I will speak more hereafter when I shall have leisure to call to my remembrance the astronomy that I learned being a young man at Salamanca, but have now almost forgotten’ (p. 89); ‘neither will I define anything one way or the other’ (p. 91); ‘with the recital of which I will not stand to trouble the reader’ (p. 93); ‘But of these novelties, more hereafter in their due place’ (p. 94) など複数箇所でも明言を避けている。

<sup>28</sup> Martin, ‘Sailing to the Moon: Francis Bacon, Francis Godwin and the First Science Fiction’ in *Literature in the Age of Celestial Discovery: From Copernicus to Flamsteed*, ed. by Judy A. Hayden, pp. 109-32 (p. 128).